仏教の危機が叫ばれて久しいが、「葬式仏教」と揶揄される一方、若手僧侶のあいだには「仏教ルネッサンス」をめざす動きもある。そこでは「ボーズ・ビー・アンビシャス(坊主よ、大志をいだけ)」が合言葉となっている。

仏教に活力をよびもどす運動といえば、在家主義の新宗教をあげなくてはなるまい。霊友会や立正佼成会、それに創価学会。いずれも日蓮系である。真言系には真如苑、天台系には孝道教団などがある。浄土真宗親鸞会もそのひとつだ。今後もさまざまな新宗教が時代状況に即応して生まれてくることだろう。

こうした動向とは別に、仏教をその創始者にさかのぼり、現代によみがえらせようとする兆候ないし営為がみられる。そのキーワードのひとつがブッダである。

紀元前5世紀ごろ、北インドのシャカ族の王子でシッダールタとよばれていた一人の青年が出家した。彼は6年の苦行ののち、悟りをひらきブッダ(覚者)になった。ふつうその名は釈迦牟尼、釈迦、釈尊、仏陀などと漢字で表記され、「お釈迦さま」と親しみをこめて言及される。ただ、シャカとかブッダとか意図的にカタカナがつかわれることがある。それはきまって宗派とは距離をおいた立場からなされている。

文庫本の『ブッダのことば』や『ブッダ最後の旅』は高名な仏教学者で東大教授だった中村元の手になる訳である。

カミ・ホトケはどこへ④

中牧(なかまき) 弘允(ひろちか)

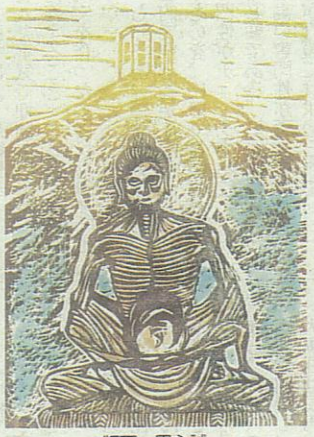
カタカナ表記 親しみやすく

ブッダ

手塚治虫は『ブッダ全12巻漫画文庫』を描いている。五木寛之の『21世紀 仏教への旅』シリーズでもブッダが一貫してつかわれている。

そうした事例は枚挙に暇がない。カタカナ表記のブッダは説経じみることなく、中立的であり、一般読者にも受け入れやすい。仏教の再評価は外部からもおこっていて、どうやらブッダと連動しているようだ。

なかでも最近の傾向は「出家」や「林住期」にかかわっている。生母をなくし「天上天下唯我独尊」と指さす誕生仏でも、弟子たちに囲まれて横たわる臨終の涅槃像でもない。妻子を捨てて出家するシャカに関心があつまっているのである。



版画・田主誠

その出家を家出とみるのは宗教学者の山折哲雄氏である。『ブッダは、なぜ子を捨てたか』のなかで、息子を「ラーフラ(悪魔)」と命名し、妻子と王城を離れ、「林住期」の自由な時期を享受したシャカの謎にせまっている。圧巻はガンジーとの比較だ。ガンジーもまた結婚し、子どもをもうけたが、遍歴の旅にでて、不殺生ならぬ非暴力をかかげ、インド独立の「聖者」となったからである。

ところで、古代インドの宗教には「四住期」といって、学生期、家住期、林住期、遊行期の四期に分ける人生設計があった。師について学び、家業に励んで妻子を養い、家を出て自由に活動し、諸国を巡り歩く時期がそれである。

これを現代日本に当てはめ、人生100年を四分割し、50歳から75歳までの林住期を謳歌すべきだと説くのは五木寛之『林住期』である。そこにはいわゆる団塊の世代も含まれる。御自身の経験に照らしても林住期は黄金期である、と。

いまや高齢社会を生き抜く知恵がブッダに求められている。29歳で出家し、35歳で悟りをひらき、80歳で往生したブッダがふたたび輝きを増している。それは先祖や死者を意味するホトケではない。苦の解決を求めて出家・放浪したシャカであり、覚者となったのちも一所不住をつらぬいたブッダである。(国立民族学博物館教授・宗教人類学)